

琥^こ
珀^{はく}
の
月

目次

琥珀こはくの月

5

番外編 日向ひなたの幸福

279

琥珀こはくの月

プロローグ

もう九月も半ばになるといのに、夜になつても暑さが去ることはなく、とろりと絡みつくような熱が夜を支配していた。

空に浮かぶ半分だけ欠けた月は、舐めたら甘そうな蜜のような琥珀色がとても綺麗で、こんな時なのに思わず見惚れた。

「……いやあ……」

突然、下肢を鋭く突き上げられて、自分の声とは信じられないか細い声が零れる。

「……随分、余裕だな」

掠れたどこか苛立ったような男の声が上から降ってくる。

見上げた先にある男——義弟の端正な顔が皮肉げな笑みを浮かべてこちらを見下ろしていた。

——余裕？ そんなものあるわけがない。

今、自分の身に起こっていることが信じられなくて、現実から目を逸らしたかったただけだ。

——義理とはいえ二人は姉弟なのに……

体を繋げている現実があまりに重たくて、逃げ出したいのに、抵抗も敵わず床の上に縫い付けら

れている自分が情けなかった。

だが、美咲を見下ろす男は現実逃避さえ許してくれない。

知らない男の顔で自分を見つめる義弟に、苦しさが増す。

——何故？ と思う。どうして？ と考える。

「……ど……お……して……」

思いはそのまま呟きになり、上げ続けた悲鳴と喘ぎに掠れた喉から零れ落ちる。

「今さら、それを聞くのか？」

呆れを隠さない声とは裏腹に、優しい仕草で頬に手を添えられ、口づけられる。

義弟の硬い指先からは、彼がいつも吸っている煙草のくせのある匂いがほのかに香った。

思わぬ優しい口づけに驚き瞳った瞳の先、義弟の長めの前髪が額に張り付いているのが視界に入る。美咲は無意識に手を伸ばし、その前髪をかき上げた。

二人の視線が絡み合う。

先ほど見上げていた月と同じ、蜜のようなとろとろの光を帯びた金褐色の瞳。

昔からこの瞳が苦手だった。時折、野生の獣のような威圧感を宿す瞳に、不穏な気配を感じて、射竦められたように身動きが取れなくなる。

綺麗な琥珀色の獣の瞳——

いつもは逃げ出したくなるのに、今この瞬間は魅入られたようにこの瞳から目を逸らせない。

「本当に、わからないのか。義姉さん？」

体の芯に深く響く美声で義弟が思わせぶりに囁く。額に添えていた手を取られた。

視線を合わせたまま、ゆっくりとした仕草で、義弟が美咲の指先、手のひら、手首に口づけを落としていく。もどかしい刺激に知らず体が震え、中にいる彼を締め付ける。自然と喘ぎ声が零れ、その反応に義弟がふつと笑った。

その笑みに緊張の糸が切れ、突然、激しいまでの感情が湧き上がる。

それが怒りなのか、恐怖なのか、悲しみなのか、美咲にはわからない。込み上げる思いのまま美咲は声を振り絞る。

「あなたの……な……にを、わか……れ……うのよ」

両親の三回忌のために久しぶりに帰ってきた実家で、子どもの頃から苦手だった義弟と二人つきり。

何も変わらないように見える家の中で、二人の距離だけが変わっていた。

両親の死から二年——久しぶりに再会した義弟は、見知らぬ男のようで戸惑った。

十代の頃から年に合わない落ち着きと威圧感を備えていたが、しばらく見ない間にその存在感は増していた。普段から立ち居振る舞いが静かで、気配を感じさせない動作は、滑らかなぶん野生の獣のようなしなやかな鋭さがあり、もともと綺麗だった顔立ちは精悍さを増していた。

気付けば、目が惹きつけられ、離せなくなる。

そんな義弟にどう接していいのかわからず、ほとんど会話もないままに、戸惑いばかりが募っていた。

夜の帳が降りてくるとともに高まっていく緊張感と、夜になっても引かない暑さに疲れ、窓辺のソファに座りため息をついたのを覚えている。

何も考えたくなくて、ぼんやりと月を眺めているうちに、いつの間にかうたた寝をしていたらしい。唇に何かが触れる感触に目覚めると、驚くほど近くに義弟の端整な顔があった。

口づけられたのだと気付いた時には押し倒されていた。

言葉も何もありません、突然始まった行為に、驚き抗う体は力強い腕に押さえつけられ、悲鳴は義弟の口の中に消えた。

恐怖に竦んだ心を置き去りにして、体は巧みな愛撫にあっけなく敗北した。気付けば熱に浮かされ、自分でも聞いたことのない甘い喘ぎ声がひきずり出されていた。

体中に征服の証を刻み込まれ、快楽に支配された体はもう自分のものではないようだった。感情とは切り離されたところで、体は快楽に溺れた。

まるで麻薬のような快楽に、涙が膜を張ったような瞳の先、見上げた月がやけに綺麗に見えて一瞬だけ、現実を忘れることが出来た。

この悪夢のような時間の中に、自分の意思はどこにもなかった。

たった数時間で、すべてのものが変えられてしまった。

義弟と再会してから続いていた緊張と、美咲の意思を無視して始まった行為に、心が対応しきれずに、張り詰めていた緊張の糸が切れ、まるで子どものように泣きじゃくることしか出来ない。

「いつ……体、なんなっ……のよ！ 何がしたっ……いのよ！」

——怖かった。これから自分がどうなってしまうのかわからなかった。

こんな状況であっても、この野生の獣のように綺麗な義弟が、本気で自分を欲しがっているなんて思えなかった。

この男にとってこれは、いつもの遊びの一環でしかないのだろう。それがわかっているから辛かった。

両親や周囲の大人たちには上手に隠していたが、十代の前半には、すでに濃厚な男の気配を漂わせていた義弟。美しい顔立ちと年に合わない存在感は、いい意味でも悪い意味でも、同年代の中では際立つて目立つ存在で、男女ともに彼の信奉者は多かった。

彼の周りには常に美しい女たちが、花の蜜に引き寄せられる蝶のように群れていて、気まぐれに女たちに手を出す義弟の姿を、半ば呆れながら見つめ続けたあの頃——時折、女の匂いをわざと纏いつかせ、それを隠そうともしない義弟を、十代の少女の潔癖さで嫌悪していた。

けれど、本当はその綺麗な琥珀色の瞳に映る女たちに嫉妬していた自分がいることを、美咲は知っている。でも、それを認めることは、決して出来なかった。認めてしまえば、美咲は美咲でいられなくなる。

——だから、嫌いだ。大嫌いだ。こんな男！

「ひ……っ、ひ、つく」

静かな部屋に美咲の泣き声だけが響く。

「あん……なんてっ……大、嫌い……」

泣きながら訴える美咲に、義弟は言う。

「知ってるよ。俺を嫌いなことなんて。でも、やめてやらない。憎まれても、恨まれてもいいから、あんたは俺を見ている。あんたは俺のものだ」

とても静かな口調で義弟は言った。あまりに身勝手な言葉に美咲は目を瞠る。しかし、言葉と同時期に激しく腰を使われ、美咲は痛みと快感にわけがわからなくなった。

「……あ、や………ん……っ！」
今まで感じたこともないような快樂の渦に、強制的に叩き込まれ、美咲の思考は意味をなさなくなる。

白く濁っていく意識の中で、義弟の琥珀色の瞳がまるで月のように輝いて見えて、綺麗だと思ったのが、美咲の最後の記憶だった——

☆

自分の腕の中で意識を失い眠る義姉の美咲を、そっと抱きしめる。

月光に照らされた彼女の顔は、涙に濡れていた。閉じられた瞼の先、睫には狂気の時間の名残の雫がいくつも絡みついていた。その雫ははまだ尽きることなく岫を伝い、美咲の乱れた黒髪を濡らしていく。

薄闇に包まれた室内に浮かび上がる白く華奢な肢体には、敦也がつけた指痕や赤い痕が無数に散

らばつていた。それは大腿のきわどい場所にも無数に残され、白濁した蜜が美咲の下肢を汚していた。

一目で陵辱されたとわかる姿——

その痛々しい姿に、満足を覚える自分はおかしいのだろう。美咲に対する飢餓にも似た想い。そんなことは、自分でもわかっている。

眠りながら、それでも泣き続ける美咲の毗に口づけて、その雫を拭った。

ピクリと美咲の瞼が震えて、睫に絡んでいた雫がまたいくつもの流れを作っていく。

涙と汗に濡れて乱れた、美咲の長く美しい黒髪を梳き整える。

絹のように滑らかな髪感触が気持ちよくて、何度も指に絡めるように梳く。

それでも、美咲はぐったりとして起きることはなかった。

『初めまして、敦也君。私は美咲よ！ 仲良くしようね』

初めて出会ったあの日——差し出された義姉の手を掴んだあの日から、自分はずっと囚われてきた。

その黒い瞳に。掴んだ手の温かさに。

敦也は昔から、この二つ年上の義姉が欲しかった。

決して自分を見ようとしないう、この義姉が……

それは、ヒリヒリと灼けつくように熱く、トロリと絡みつくように甘い、渴望だった。

抱き寄せた美咲のぬくもりは心地よかった。だが、これだけでは満足出来なかった。敦也にはそ

れ以上に欲しいものがあつた。

初めて抱いた美咲の体はまるで甘い毒のように、敦也の体に深い快楽をもたらした。

排泄行為としてのセックスとは違う、全身が総毛立つような深い官能。

快楽に染まって泣く美咲の瞳に映る自分を、もう一度見たかった。

美咲を追い詰めても、苦しめてもいいと思うこの想いは、綺麗なだけの感情ではない。

胃が灼けつくようなこの飢餓にも似た想いを鎮められるのは、ただ一人、義姉だけ。

家族としての優しいだけの情愛も、温かいだけの絆もいらぬ。

表面上は穏やかだった家族ごっこに終わりを告げる時が来た。

二度と自分は美咲を義姉とは呼ばないだろう。

自分はもう決めてしまった。

美咲を泣かせても、憎まれても、自分という男を美咲に刻み込む。

涙に濡れてその色を漆黒に染めた美咲の瞳に映る男は自分だけでいい。

眠る美咲に口づける。

自分の腕の中で眠る美咲は、誰よりも美しい。

もう自分はこの存在を手放すことは出来ない。

——ならば、手に入れるだけだ。

夜が明けていく。

まるで絡みつくようだった、熱を孕んでいた狂気のような夜が。夜が明けた時、二人の関係は何もかもが変わっているだろう。敦也が望んだままに――

第一章 パンドラの箱の底に沈めた恋

いつからだろう？

義弟の――敦也のあの琥珀の瞳が苦手になったのは……

初めて出会ったあの日、これから自分の義弟になるという二歳年下の敦也は、まるでお人形のよう可愛くて、その茶色の瞳がガラス玉みたいに綺麗で、嬉しかったのを覚えている。

母は美咲が三歳の頃に交通事故で亡くなり、父は男手一つで美咲を育ててくれた。だが、仕事の忙しかった父は家を空けることも多く、小さな美咲はいつも祖父母の家に預けられていた。

祖母は美咲をとて愛してくれたし、仕事で忙しい父が美咲を大切にしてくれているのはわかっていたから、寂しいと思うことは少なかったような気がする。

美咲が七歳になった時に父が再婚し、美咲には新しい母親と二歳年下の弟が出来た。それが敦也だった。

元モデルだったという美しい母親によく似た敦也は、子どもの頃からとても秀麗な顔をした、まるで人形のように可愛い子どもだった。

新しく出来た家族を、美咲は素直に喜んだ。

再婚前に両家の顔合わせを兼ねた食事会の席で、初めて見た敦也の瞳があまりに綺麗で、この子が弟になるのかと興奮した。

「初めまして、敦也君。私は美咲よ。仲良くしようね」

差し出した美咲の手を掴んだ、敦也の小さな手の感触さえも覚えている。

多分、あの時に、自分は彼の琥珀色の瞳に魅入られたのだろう。

それからしばらく、琥珀の瞳が見たくて、敦也の顔を覗き込むのが美咲のくせになったくらいには――

だが、いつの頃からだろう？ 敦也の琥珀の瞳に不穏なものを感じるようになったのは。

その琥珀の瞳が苦手になったのは。

まるで、獲物を狙う野生の獣のように鋭くこちらを見つめてくる敦也の瞳が、美咲は怖くて仕方なかった。

その瞳は、美咲の中で眠る何かを揺り起こす――それを感じていたのかもしれない。

目覚めはひどく不快だった。体は鉛のように重く、指を動かすのさえも億劫だった。

寝返りを打とうとしても、だるさを訴える体は美咲の言うことを聞こうとはしなかった。特に腰から下は自分のものではないように重く、痺れていた。

体が熱かった。そして、喉がひどく渴き、痛みを訴えている。

熱が出ているのかもしれないと美咲は思った。

だから、こんなに体がだるいのだろうと考える。

泣きすぎた後のように腫れぼったい臉を開くと、そこは大学進学までの十八年間を過ごした実家の部屋だった。

窓から差し込む光はもう黄金色になり、時刻を確認すれば夕方の六時を過ぎていた。

——あれ、いつ実家に帰ってきたんだっけ？

そう思った次の瞬間、一気に美咲の脳裏に昨夜の出来事がフラッシュバックする。

「ああ！」

掠れた叫びが美咲の喉から零れる。

——敦也！あの琥珀色の獣の瞳をした義弟に自分は……!!

「なん……で……」

がたがたと体が震えた。

半ばパニックになりながら、美咲はまるで自分のものではないような体を起こす。

そして、自分が素肌を曝したままであることに気付いた。

見下ろした自分の体中に散る赤い花びらのような痕に、昨日の生々しい感触が蘇る。

胸や内腿のきわどい部分を中心として無数に散った赤。手首には抗った美咲を押さえつけた時に出来たのだろう、指の痕がくつきりと残っていた。

体中に刻み込まれた敦也の痕は、昨日の狂気のような出来事が現実だったと知らしめてくる。

まるで、刻印のように刻まれたそれらを、美咲は呆然と眺めた。

夢だと思いたかった。

何もかもが悪い夢だと思いたかった。

だが、体中に刻まれた痕は、それを許してはくれない。

そして思い出すのは、美咲を揺さぶりながら言った敦也の言葉。

『知ってるよ。俺を嫌いなことなんて。でも、やめてやらない。憎まれても、恨まれてもいいから、

あんたは俺を見ている。あんたは俺のものだ』

あまりに身勝手な言葉。美咲の意思も、何もかもを無視したものだだった。

「……ふふ」

どれくらいそうしていたのかわからない。

やがて、パニックが去った後の美咲の唇から乾いた笑いが漏れた。

——何が、あんたは俺を見ているよ！　何が、あんたは俺のものよ！
美咲は知っている。

——たとえ、美咲がああ男のものになったとしても、あの美しい獣が決して美咲のものにはならないことを！！

自分の中の奥深くに、頑丈に鍵をかけて閉じ込めたものがある。

普段は忘れて、意識することもないそれが、美咲の心をかき乱す。

美咲は固く脛またを閉じて、指が白くなるほど強くシーツを握り締めた。

——何も思い出すな。何も感じるな。これは開けてはいけないパンドラの箱。

最後に残っているのは、希望ではなく絶望なのだから——

☆

絡みつくようだった厳しい残暑も、十月に入るとようやく秋らしい涼やかな夜を過ごせるようになってきた。

半分だけ欠けていた月も徐々にその本来の姿を現し、綺麗な円形になっている。

それに呼応するように、美咲の体に残された陵辱ろうじゆくの痕は、少しずつ消えていった。

ひとつ、ひとつ。痕あとが消えていくたびに、美咲の心も少しずつ平静を取り戻していった。

そして、あの夜から二週間が経とうとしていた——

「お疲れ様でした」

「お疲れ様」

「あ、美咲！　これから飲みに行かない？」

「ごめん、今日は疲れてるから、また今度」

仕事が終わる美咲は同僚たちに声をかけると、職場を後にする。

美咲が勤める『彩華さいか—SAIKA—』は県内に数店舗を展開する、オーガニック系コスメや食品、アロマ用品などの雑貨を扱うリラクゼーション系総合サービスの会社だった。社員数は三十人と少ないが、その分フットワークも軽く、徐々に業績を伸ばしている。

美咲は大学の頃から販売員のバイトとしてここで働いていた。バイト時代に社長に気に入られ、そのまま正社員として就職した。

明日は久しぶりの休みだった。普段の休日前の夜なら、友人や同僚たちと飲みに行ったり、恋人の安田恭介やすだきみすけとデートを楽しんだりするのだが、今はまだ、そんな気分にはならなかった。

美咲は一人、最寄の駅に向かって歩く。知らず、ため息が漏れた。

——何もなかった。あの夜には何もなかったのだ。
——何も聞かせること、美咲は必死に自分を保っていた。

すべてのことに目をつぶり、耳を塞いで普段通りの日常を演じる。たとえそれが、薄皮一枚の上

の危ういバランスのもとに保たれたものだとしても、美咲はあの夜の出来事を忘れたかった。

仕事中や誰かという時は、ほとんど成功していたが、こうして疲れた夜に一人でいると、日常の底に閉じ込めたはずの悪夢が顔を出しそうになる。

浮かび上がってくる映像を振り払いたくて、美咲はギュッと目をつぶった。

——違う！ 知らない、こんなこと！ あの夜には何もなかったのだ!!

「美咲！」

切れ切りに浮かび上がってくる映像に、美咲が恐怖に包まれそうになった瞬間、後ろからよく知った声に呼ばれた。

ハツとして振り向くと、そこには恋人の恭介がいた。

走ってきたのだろう。息を切らせた様子の恭介が美咲に向かって微笑む。

その顔に安堵と罪悪感を覚え、美咲はぎこちない微笑を浮かべることしか出来なかった。

「どうしたの、恭介？ そんなに焦って……」

「美咲に会いたくて店に行ったら、今帰ったばかりだったって聞いたから、走って追いかけてきた」

荒い息のままにこりと微笑む男に、美咲の胸の奥が疼く。

「電話くれればよかったのに……」

「言われてみればそうだな」

美咲の言葉に、恭介の優しい顔が困ったようになり、言葉を濁して視線が逸らされた。

その様子に、美咲の笑みも強張り、ぎこちない沈黙が二人の間に落ちる。

取引先の担当者だった三歳年上の恭介と付き合って二年。最近はずいぶんお互いに結婚を意識していた。だが、ここ二週間、美咲は恭介とうまく接することが出来なかった。

「なんか、美咲が実家に帰ってから避けられている気がする」

思い切ったように、恭介がそう言った。

「何で？ 私が恭介を避ける理由なんてないよ？」

美咲は平静を装って、何とか微笑らしきものを浮かべて答えるが、その笑みが強張っているのが自分でもわかる。

——嘘。本当は恭介を避けていた。

最初は敦也が残した痕を見られるわけにはいかななくて。

今は、無理やりであっても敦也に抱かれた自分を恭介に知られたくなくて、美咲は彼から逃げた。いた。

「最近、電話してもメールしても、仕事以外で会ってくれなかっただろう？ だから……」

「ごめん」

美咲は恭介との距離を詰めると、その大きな手を握る。

「美咲？」

罪悪感に歪みそうになる顔を見られたくなくて、恭介の肩に額を押し付ける。

「ごめん。両親の三回忌が終わって、ちょっとナーバスになってる。今さらだけど、両親がもういないんだって実感しちゃった」

その言葉に恭介の体から力が抜けるのを感じた。嘘ではなかった。でも、本当の理由でもない。

「そっか。そうだよな。こっちこそごめん。美咲が実家に帰っていた理由を、ちゃんと考えてなかった」

「ううん。ちゃんと話せなくてごめん。うまく気持ちの整理がつかなくて……」

「いや、俺が悪い。変な勘違いしてた。他に好きなやつでも出来たのかって、妙に焦った」

おかしいよなと苦笑する恭介の言葉に、何故かどきりとした。

脳裏に浮かぶのは敦也の琥珀色の瞳。その瞳が美咲の嘘を嘲笑っているように思えた。

——違う！ 違う!! 私が好きなのは、恭介だけだ！

美咲はそれを振り払いたくて、甘えるように恭介の肩に額を擦り付ける。肩に恭介の腕が回され、往來の真ん中で抱きしめられた。比較的、人通りの少ない時間帯だったおかげで、周囲に人はいない。

「もう少しだけ、待って。ちゃんと気持ちの整理をつけるから」

「俺もいる。あんまり一人で抱え込むなよ」

「わかった。ありがとう」

ぎゅっと美咲を抱く恭介の腕に力がこもる。

美咲の言い訳をすんなりと信じてくれた恋人の優しさに、どうしようもない罪悪感が込み上げてきた。

でも、あの夜のことを、恭介にだけは絶対に知られたくなかった——

途中まで送ってくれた恭介と別れ、美咲は自宅マンションまでの短い道のりを歩く。

住宅街を歩きながら見上げた月は、綺麗な満月だった。

舐めたら甘そうな綺麗な琥珀色。あの夜、最後に見た敦也の瞳と同じ色。

今日、恭介に言われた他に好きなやつという言葉に、何故か浮かんだ敦也の瞳。

その瞳が恭介と過ぐす美咲を攻め立てる。

考えたくもないのに、今、思い出すのは敦也のことだった。

昔も、今も、美咲には敦也が何を考えているのかわからなかった。

ただ言えるのは、あの綺麗な琥珀色の獣の瞳をした男が、決して本気で自分を欲しがることはないということだけ。

あの夜、敦也が言った言葉を、美咲は信じていなかった。

信じるつもりなんてなかった。

あれは、敦也にとつて、ただの気まぐれでしかない。義弟を毛嫌いしている自分に対しての、度を過ぎた嫌がらせだ。

そうに決まっている。それで美咲がどれほど傷つくかなんて、あの義弟はわかっていないのだ。

その証拠に、目覚めた美咲は実家に一人で取り残されていた。

敦也の存在に怯える美咲の心を嘲弄するように、義弟はどこにもいなかった。

あの瞬間、敦也の気まぐれに踊らされ、飽きればあっさりと捨てられる存在でしかないのだと思

い知らされた。

冗談じゃなかった。自分は玩具ではない。心もあれば感情もある人間だ。ままならない体のまま、美咲は逃げるように実家を後にした。

もう敦也と会うつもりはなかった。

ピアノストとして活躍し、もともと海外を拠点にして生活している敦也とは、美咲が大学に入学してから、それこそ数えるほどしか会っていない。あの夜を含めても片手で足りるほどだ。

両親の葬儀の時でさえも、敦也は仕事のために帰ってこなかった。

意識して避ければ、たとえ義姉弟といってももう会うことはないだろう。

このまま、何もなかったようなふりを続ければ、やがて真実は日常の中に埋没していくだろう。

なのに、辿り着いたマンシヨンの部屋の前。まるでそんな美咲を嘲笑うように、二度と会うつもりがなかった綺麗な琥珀色の獣の瞳をした義弟が立っていた。

壁に背を預けて俯く男の姿に、鼓動が音を立てて打った。

「敦也……？」

驚きに零れた声に反応して、敦也の眼差しが真っ直ぐ美咲に向けられた。

先ほど見上げた月と同じ琥珀色に輝く瞳をした義弟は、やはり美咲の知らない男の顔で、美咲はその腕に捕らえようと手を伸ばしてくる。

驚きに身動きすら取れなかった。掴まれた腕の痛みが、これが夢でも幻でもなく、現実なのだ

美咲に教えた。

美咲の手の中で、部屋の鍵についているキーホルダーが、ちらりと音を立てる。

それは、日常の底に閉じ込めたはずの悪夢が、再び美咲を捕らえた瞬間だった。

——どうして!!

美咲にはわからない。

何故、再び、敦也が美咲の目の前に現れたのか。あれは一夜限りの悪夢だったはずだ。

あの夜の出来事は何もかも忘れるつもりだった。忘れたはずだった。

——なのに、どうして……!!

今また自分は、こうして敦也の腕に捕らわれているのだろう。

抵抗してもがいても、敦也の腕から逃れることが出来ない。美咲の手から部屋の鍵を奪った男は、片手で器用に美咲を拘束したまま玄関の鍵を開ける。引きずり込まれるようにワンルームの部屋の中に連れ込まれ、ベッドの上に体を放り投げられた。

「嫌……っ！」

逃げようと美咲が体を起こす前に、敦也の大きな手が、簡単に美咲の体を白いシーツの上に縫い付けた。

恐怖が一気に美咲の中で弾けた。無我夢中で逃げようと抗ったが、男の力に敵うわけもない。

仕事中、邪魔になるからと纏めていた長い黒髪が、暴れるうちに解けてシーツの上に乱れ、幾筋もの流れを作った。

「やめて!!」

すべての抵抗を封じられたせめてもの抗議に、美咲は体の上の敦也を睨みつける。暴れて上気した肌と潤んだ瞳が、男の劣情を刺激することに美咲だけが気付かない。

カーテンを開け放したままの部屋を、あの夜と同じように月光が照らす。満月の今日。月明かりだけでも、部屋の中は明るかった。

蒼い闇の中、浮かび上がる敦也の野生的で端整な顔。その眼差しは鋭く、まるで本当に獲物を狙う野生の獣のように、蜜色に光って見えた。

「……いや。や……めって!!」

悲鳴も懇願も敦也には通じない。気付けば吐息が触れるほど近くに、敦也の琥珀色に輝く獣の瞳があつた。その瞳に、射竦められる。

あの夜に覚えた痛みと快楽の記憶が美咲の体を呪縛して、一瞬、抵抗を忘れた。

「んんっ!!」

その隙を突くように乱暴に口づけられた。

悲鳴を上げるために開かれた口腔内に、あつさりと傍若無人な敦也の舌が進入し、恐怖に竦む美咲の舌に絡みついてくる。

何もかも奪いつくすように、強引な舌が美咲の口の中を動き回る。敦也の吸う煙草の苦い味と香りが口の中に広がった。

「うっ……ん……」

飲み込めない唾液が唇の端を伝い落ちる。角度を変え何度も執拗に舌を絡められ、歯列の裏、上

顎を舐め尽くされる。

暴れる舌に噛み付く気力さえ奪われて、何度も背筋を駆け上がる甘い疼きを堪えさせられた。

自分の鼓動と二人の唇から聞こえる濡れた音がやけに耳につく。

いつの間にか、掴まれていた手首が解放されたことにも気付かない。

知らず絡めるように繋がれていた大きな手に、震える指先が縋っていた。

「……ふあ……あ……は……」

やっと解かれた口づけに、二人の間に唾液が透明な糸を引いた。

新鮮な空気を求めて、美咲の息が上がる。濡れた唇を敦也の長い指が拭った。

びくりと、そんな些細な刺激にも体が反応する。

体はぐったりとして力が入らないのに、肌は神経が剥き出しになったように、どこもかしこもびりびりとしていた。

とろりと炙られるような熱が体の奥を支配する。

二十五歳で恋人もいる今、セックスを知らないなんて言うつもりはない。

だけど、こんな体の内に収まりきらない、淫らな熱なんて知らなかった。

キス一つで、あつさりと昂る自分の体が信じられなかった。

きわどい位置で重なる腰に、敦也の欲望が煽るように擦り付けられる。布越しに感じる確かな熱量を持ったものに美咲の体の奥が疼き、自分の意思とは関係なく腰が揺らめいた。

卑猥なその動きに、美咲は目の前が赤く染まる気がした。

なのに、自分を見下ろす敦也は、息一つ乱してはいない。

「……どお……して……」

平静そのものの敦也の表情に、意図せずあの夜と同じ問いが美咲の唇から零れ出た。

何度考えてもわからない。この美しい義弟の瞳に適う何かが、自分にあるとは思えない。

美咲はどこにでもいる平凡な女だ。それこそ、どんな女でも望めば手に入るだろう敦也が、自分を抱く理由なんて嫌がらせ以外に思いつかなかった。

ただの嫌がらせだというのなら、あの夜だけで十分だろう。

たった一晚で、美咲は心も体もボロボロになった。必死に平静を装い、何もなかったふりを続けていたが、本当は何一つ忘れてはいなかった。

何もなかった、忘れたのだと必死に言い聞かせたのは、あの夜の出来事を何一つ忘れることが出来なかったからだ。

力強く強引な指先、濡れた唇の感触。甘く麻薬のような快楽のすべてを、美咲は覚えていた。

日常の奥底に閉じ込めた悪夢は、ふとした瞬間に顔を覗かせて美咲を苛んだ。

痛かった。心も体も、敦也がああに夜に残した甘すぎる痛みに、いまだ悲鳴を上げている。

これ以上の痛みにはもう美咲は耐えられそうになかった。

これが、ただの気まぐれや遊びであるなら、もうやめてほしかった。

美咲の毗から幾筋もの雫が流れる。涙で霞む瞳では、敦也がどんな表情を浮かべているのか見えなかった。

自分だけが無防備に感情を曝し、そのすべてを敦也に見られている。

それがたまたまなく嫌だった。

せめてもの抵抗に、美咲は顔をシートに押し付け、泣き顔を隠す。

敦也は何も答えなかった。

ゆっくりと敦也が美咲に近付いてくる。顔を横に向けたことで曝された首筋の、拍動する動脈に敦也が口づけた。

人間の急所の一つである頸動脈の上を敦也の唇が辿っていく、時々、そこを甘噛みされる。

美咲は自分が本当に肉食の獣に食われる小動物にでもなった気分だった。敦也の歯が首筋に当たると、微かな痛みが体で震える。

いつ敦也の歯が自分の首筋に突き立てられるのか。

その怯えに、ひやりとした疼きが背筋を伝い落ちる。それと同時に、敦也の熱い舌が与える甘い痺れ。相反する刺激に、美咲の体は異様なほど昂った。

ゆっくりと舐め上げるように敦也の唇が動き、首筋の柔らかい皮膚に噛み付かれた。

肌食いこむ歯の感触と痛みに、心も体も竦む。

「……い……あ……」

痛みに仰け反り仰向いた美咲の首筋に、敦也の吐息がかかった。薄く血が滲んだ噛み痕は、敦也の吐息にさえ、ぴりぴりとした痛みを訴える。

滲んだ血を舐め取る敦也の舌の感触に、美咲の体が跳ねた。

「……く……あん」

敦也は美咲の反応を楽しむように、何度も自分がつけた傷口に口づけた。そして、熱い唇を徐々に耳元へ移動させていく。

「理由ならあの夜に言った」

耳朶を食みながら敦也が低く艶のある声で囁く。

囁かれた言葉の意味が一瞬わからなくて、美咲は閉じていた瞼を開いた。

至近距離で敦也の獣の瞳と目が合う。明らかな艶と情欲を孕んだ瞳が琥珀色に輝き、美咲だけを見ていた。

囁かれた言葉が先ほどの美咲の問いかけに対する答えなのだと知る。

「俺は選んだ」

何を、と問うことは出来なかった。

視線を逸らすことなく敦也が再び美咲に口づけてくる。

雲が月を隠し、束の間、部屋が暗闇に閉ざされた。すぐ傍にある敦也の顔が見えなくなる。

だが、その瞳が自分だけを見つめていることを感じていた。

唇を啄むように優しいキスを繰り返す敦也が、何を思っているのか、ますますわからなくなる。

暗闇の中、与えられるキスはあまりに甘く、昂った体はさらに熱を上げた。

雲が切れ、再び月光が部屋の中に差し込んでくる。

離れていく敦也の唇に、心臓が痛みを訴えた。

「ふ……」

心臓が、体が、痛くて、痛くてたまらない。

敦也が与えてくるものは、美咲には鋭くて、熱くて、触れるだけで身も心も壊れてしまいそうだった。

——このまま、自分は壊されるのだろうか。この傲慢で綺麗な獣のような義弟に。

再び敦也に抱かれれば、もう自分を保てない。本当に壊れる。

「……もう……やめ……て」

泣いて懇願するが、敦也は美咲を離さない。抱きしめる腕に力を込め、乱れた服の下にその長い指を潜り込ませてきた。

強引な指先が、過敏になっていた美咲の肌をさらに煽り立てるように触れてくる。

「諦めろ」

拒絶は許されなかった。

いや、いやと痛む首筋を振り、弱々しく抵抗する美咲に構うことなく、敦也は美咲が着ていた服を剥ぎ取っていった。

月下にすべてを曝される。興奮で薄紅に染まった素肌、尖る胸の頂、触れられてもいないのに濡れた蜜を零す秘所。

美咲を守るものは何もなかった。

ばさりと最後に敦也が自分の着ていた服を脱ぎ捨て、ベッドの下に放り投げる。

細身なのに鍛えられた敦也の張りのある素肌と、美咲の素肌が絡む。

開かされた足の間に、敦也の体が割り込み、太腿に先走りに濡れた熱い欲望が当たる。

抵抗する気力は、首筋を噛まれた時に挫かれた。何もかも奪い尽くされ、壊される時間を待つばかり。

美咲はただ、この毒のように甘く苦しい時間が、一刻でも早く終わることだけを願った。

「んん……ああ……」

敦也が蜜の潤いを指に纏わせて、美咲の秘所をくつろげるように動かす。

濡れていた秘所は、ほとんど抵抗もなく敦也の指を受け入れた。ずっと昂っていた体は数回、指を往復され、快楽の芽を擦り上げられただけで、あっさりと頂点を迎えた。

嫌なのに、敦也が与える快楽に手も足もなく屈服する自分の体が信じられない。

「い……やああ……」

なのに、昂った体の熱は鎮まるどころか、ますます熱くなっていく。

体の奥の熱を鎮めたくて、敦也の指に合わせて腰が揺れる。背がしなり、突き出す形になった淡く色づく胸の頂を敦也が口に含み翳った。

イッたばかりの過敏になった肌に、余すところなく敦也が手を這わせ、口づけていく。

媚肉は淫らな水音を立て、自分の中を行き来する指を締め付ける。濡れて疼く秘所は指では物足りなくて、美咲は無意識に敦也の腰に足を絡めていた。

それに応えるように、敦也自身が美咲の濡れた秘所に押し当てられる。

しかし、当てられた剛直は、焦らすみたいに表面を滑るばかりで、美咲の中には入ってこない。苦しくて、我慢出来なくて、美咲は濡れた腫で敦也を見つめた。

自分から求めることはしたくないのに、体が心とは裏腹にこの義弟を求めている。

絡んだ視線に、敦也が満足げに嗤った。

「……美咲」

敦也が美咲の名前を呼び、耳朶に舌を這わせる。

ぐっと入り口に強烈な圧迫感を覚え、美咲の思考は散漫になる。

「あん……んん！ んあ……!!」

「美咲、俺はもう選んだ。だから……」

耳朶に執拗にキスを繰り返しながら、敦也が一気に奥まで美咲を貫いた。

「……ああ、……んん!!」

ようやく与えられた熱に、一瞬、意識が白く拡散するが、強烈な圧迫感と微かな痛み、意識が戻される。

「だから、今度は美咲が選べ」

美咲の耳元で敦也が囁く。敦也の低く艶のある声は、美咲に何かの選択を求めている。

だが、美咲には敦也が求めるものがわからない。

間を置かずにつなぐ腰を敦也が深く浅く穿つように動き始めたせいで、敦也が自分に何を求めているのか、余計にわからなくなった。

執拗に揺らされて、快楽に喘ぎ、息が出来なくなる。

苦しくて、酸素を求めて、肺が軋む。苦痛なのか快楽なのかわからないものに、体が支配される。絶るものを求め、敦也の張りのある背中に爪を立てた。

何も考えられなかった。考える余裕なんてない。

ぐずぐずと自分の中が熟れて崩れる。鎮まることのない熱が波となって美咲を襲い、ただ快楽に溺れ続けた。

その晩、長い長い時間をかけて、美咲は本当に壊された。

慰めを求め、あの夜と同じように月を探す。だが、美咲が求めた月はどこにもなかった。

☆

「んっ……んっ、んっ！ ……あッ、や、やあ……」

執拗に絡めていた舌を美咲が苦しげに何度も何度も首を振って解く。乱れた黒髪が白いシーツの上に広がり、酸素を求めるように喘いでいるのが見えた。けれど、快楽に喉が詰まり、うまく息が吸えていないのだろう。苦しげに開かれた口の中、唾液に濡れた紅い舌が震えていた。

まるで、敦也を誘うようなその舌の震えにまた欲情が増し、腰の動きが速くなるのがわかった。激しくなった律動に、泣きながら仰け反った美咲の首筋には、敦也がつけた噛み痕がくつきりと残っている。

自分がつけた噛み痕に満足感を覚えた。一生、消えなければいいと思った。

——美咲は自分のもの。その刻印を誰が見てもわかるように刻み付けたい。

敦也が何度も口づけるせいで、うつすらと腫れている赤い傷跡に舌を這わせると、びくびくと不規則に美咲の体が跳ね、敦也を包み込んでいる粘膜が痙攣したように収縮する。敦也の何もかもを搾り取ろうとするような、濡れた艶かしい動きに一気に射精感が高まる。他の女たちでは感じたことのない甘い疼き、腰から背筋を駆け上がり、奥歯を噛んで堪える。

敦也の腕の中で、揺さぶられ快楽に泣く美咲は、自分の体がどれだけ淫らな動きをしているか気付いていないだろう。

「……や……ん、い……やあ……」

甘く蕩けた泣き声を上げるくせに、美咲の口から零れるのは敦也を拒絶する言葉ばかり。それが我慢出来ない。

追い上げるような動きで体を揺さぶり、目を閉じた美咲の耳を舐りながら名前を呼ぶ。

「美咲。美咲、目を開ける」

義姉の名を呼ぶ声は、自分でも呆れるほどに甘く卑猥だ。

快楽に泣きじゃくる美咲が、従順にその濡れた虚ろな目を開いた。

舐から幾筋もの涙が、雫となって流れていく。

焦点の合わない黒く濡れた美咲の瞳に、敦也の獣じみた獰猛な顔が映り込む。

その瞬間、敦也は自分の征服欲が満たされると同時に、美咲をどこかに閉じ込めたいという凶

暴な思いが湧き上がるのを感じた。

誰の目にも触れさせず、美咲の瞳が敦也以外の誰かを映すことがないようにしてしまいたい。

——自分はやっぱり歪ゆがんでいる。でもそんなことは、初めから知っていた。濡れた黒い瞳と視線を絡めたまま、蹂躪じゅうりゅうするように美咲の唇を奪う。

「ん！ んん！ んーっ……」

敦也の口の中に美咲のくぐもつた悲鳴が溶けていく。首を振って逃れようとするのを許さず、さらに喉の奥深くまで、舌で舐なめ上げる。

美咲の細い指先が敦也の背に食い込み、痛みをもたらしたが、それすらも快感だった。

ただ腰を振り、もつと奥の奥まで犯し、精液を最後の一滴まで美咲の中に吐き出したい。

淫みだらな快楽と痛みで、美咲の中に自分という男を刻み付ける。

執着あつという名の愛に縛られる美咲は憐あはれだ。

——だが、もう引き返せない。諦めて自分を弟に持った運命を受け入れてもらうしかない。

最後の追い上げに美咲の感じるところを狙って、腰を突き動かす。

濡れたシートの上から浮き上がるほど美咲の背がしなり、イッたのがわかる。敦也を受け入れている中が、絡みつくようにうねり、きつく敦也のそれを締め付けてきた。

美咲に引きずられるように敦也も絶頂を迎える。解放は一瞬のようにも、長くにも感じられた。

脈打ちながら吐き出される体液の最後の一滴までも、美咲の中に放出する。

パタリと敦也の背に縋すがっていた美咲の指先が、力なくシートに落ちた。

また、気を失ったのだろう。脱力した美咲から自身を引き抜くと、どろりと白濁した蜜あぶが溢れ出し、シートを汚した。

避妊するつもりは初めからなかった。子どもが出来ても構わない。美咲を縛る鎖くさりになるのなら、自分は歓喜するだろう。

『敦也、ダメよ！ 美咲は私たちとは違う。あなたのそれは、愛じゃない！ ただの執着よ。そんなものに囚とらわれたら、あなたも美咲も不幸になるわ。だから、美咲のことは諦めなさい』

不意に母の言葉を思い出す。

敦也の狂気にも似た美咲への想いを、誰よりも理解していたのは彼女だった。

敦也と同じだけの激しさを持っていた彼女は、いち早く敦也の想いに気付き、美咲を守るために

二人を引き離した。

だが、もう敦也を抑える楔くさびとなっていた母——マリアはいない。

あの日——両親の三回忌のために久しぶりに帰国した日本。

ふらりと墓に現れた敦也を、美咲は驚いたように見上げていた。両親の急死の際も、どうしても抜けられない仕事のせいで、葬儀にすら間に合わなかった敦也が、三回忌のために帰国するとは思っていなかったのだろう。

久しぶりに会った美咲は、敦也の記憶の中の彼女よりもずっと綺麗になっていた。

昔から綺麗に伸ばしていた胸元まである黒髪。真っ直ぐな柔らかい眼差しを宿す黒い瞳。

何もかもが鮮やかな色を持って飛び込んできて、敦也は目を奪われた。

もう九月だというのに、まるで夏のような日差しの下。振り返った美咲の黒い瞳と目が合った瞬間、敦也は思い知った。

美咲がもう自分の中で、完全に義姉ではなくなっていることを。

そこにいたのは、敦也の恋い焦がれたただ一人の女だった。

驚愕に見開かれた瞳が、戸惑いの光を浮かべた後、優しく微笑んだ。敦也は瞬きもせず、それに見惚れた。

『お帰り』

ぽつんと美咲が呟いた。子どもの頃は別として、思春期を過ぎてからは自分の中の苛立ちを美咲にぶつけるように、わざとだらしなさを見せつける真似をしていたせいで、美咲から避けられていた。

——避けていてほしかった。

そうでなければ、自分の牙が美咲に向けてしまいそうで怖かったのだ。

美咲への叶わぬ恋に『理性』と『感情』が葛藤し、苛立つてばかりいたあの頃。どうにもならない苛立ちを何も知らない美咲にぶつけていた自分は、青く未熟だった。

そんなことをしてもどうにもならないことはわかっていたのに、どうしようもない苛立ちと焦燥が敦也を焦がしていた。

ただだけの関係の女ならたくさんいたが、誰も敦也の飢餓感を癒してはくれなかった。

——怖かった。自分の歪んだ腕の中に、美咲を閉じ込めてしまうことが……

美咲を傷つけることしか出来ない自分では、彼女を幸せに出来ないとわかっていたから、マリアが美咲を守るために、敦也を留学させようとした時も逆らわなかった。

距離を置けば、時間を置けば、やがては美咲への恋も風化していくと思っていた。

だから留学してからずっと、余程のことがなければ、帰国することはなかった。

両親の葬儀にすら間に合わなかった自分。なのに、美咲は一言も責めなかった。

ふらりと現れた敦也に戸惑いは見せても、出会った頃と同じ柔らかい優しさを持った笑顔で、自分を迎えてくれた。

あの瞬間に、敦也は再び美咲に恋をした。

義父が死んだことで敦也の中にあつた最後の良心は消え、タブーを犯す背徳感も罪悪感も、美咲の前に弾け飛んだ。

たとえ、血の繋がった姉弟だとしても、敦也はもう美咲を逃がしてやることは出来ない。

——そう。多分、美咲と自分は本当に血が繋がっている。

それは幼い頃から敦也の中にある疑惑ではなく、確信だった。

きつと、美咲は気付いてもいないだろう。自分たちに血の繋がりがあんなんで。

敦也は自分の実の父親について何も知らされずに育った。

マリアは未婚で敦也を産み、高藤の義父と結婚するまで、一人で敦也を育てていた。

ハーフだったマリアから、色素の薄い髪と瞳という日本人離れた外見を受け継いだせいで、気付く人間はいなかったが、敦也は血の繋がらないはずの高藤の祖父の若い頃によく似た顔立ちをし

ていた。

もうすでに鬼籍きせきに入っている高藤の祖父母は、長男の後妻の連れ子である敦也にも、本当の孫たちと分け隔てなく接してくれる優しく穏やかな人たちだった。

敦也は美咲とは別のところで、新しい義父と新しい祖父母を尊敬していたし、愛してもいた。だが、小学校の高学年の頃、たまたま見つけた祖父母のアルバム。セピア色に色あせた写真の中に写る高藤の祖父が、自分と同じ顔をしていることに気付いて衝撃を覚えた。まさかと疑い始めたのはその時からだ。

自分の名前にすら過敏になった。かつて、学校の宿題で自分の名前の由来を両親に聞いてみようというものがあつた。

マリアから聞かされた敦也の名前の由来は、マリアにとつてとても大切な人から一文字取つてつけたと聞かされた。その相手についてマリアは詳しいことを話したがらなかったが、子ども心にそれが自分の本当の父親のことだと直感した。

高藤敦浩あつひろ。自分と一文字違いの義父の名前——疑い出せばきりがなかった。

そして、見つけた高藤の祖父、義父と敦也に共通したもの。三人とも左の肩甲骨の下に三つ並んだ黒子ほくろがある。

黒子の位置は遺伝するものがあると、何かで聞いたことがあつた。

ほとんど同じ位置で、同じ大きさの三つ並んだ黒子は、敦也の中の疑惑をさらに深めた。年月を経るごとに、鏡に映る自分は子どもの時に見たアルバムの中の祖父に近付いていく。

はつきりと確かめたことはない。確かめる前に両親は事故で亡くなり、敦也は永遠に両親に真実を確かめる機会を失った。

敦也が生まれた頃、高藤の義父には、まだ美咲の母親がいたはずだ。

男と女の間であれば、どうにもならないことがあるのも理解出来る。まして、自分と同じような激しさで歪ゆがみを持っていたマリアだ。たとえ、相手に家庭があつたとしても、諦めるような性格じゃないことは、簡単に想像がついた。

両親のしたことについて、敦也は責めるつもりはない。

もし、両親に対して何か言うことがあるとすれば、それは美咲に引き合わせてくれた感謝だけだ。このことを知れば、ますます美咲は敦也を憎み、逃げ出そうとするだろう。

しかし、敦也はもう美咲を逃がしてやるつもりはない。美咲が実の姉でも構わない。半端な覚悟で美咲に手を出したわけじゃない。

血の繋がりがりだとか、家族の絆きずなだとか、そんなものはどうでもよかった。どうしようもないほどに美咲が欲しいと思った。

結局、距離や時間なんて関係なかったのだ。きつと、自分は何度だつてこの義姉に恋をする。

だからもう、美咲が敦也以外の誰も見ないように、その身も心も、食らい尽くすことにした。敦也と美咲を繋ぐもの——それは、どろりと濃く、赤い色をした血の絆きずなかもしれない。

それすらも愛おしいと思う自分は、きつと狂つた獣。

気を失つた美咲を、敦也はそつと抱きしめる。

「……み……ず……」

抱き寄せると美咲が泣きすぎてひどく掠れた声で、呟くのが聞こえた。

気を失ったとばかり思っていた美咲の呟きに、敦也は腕の中の美咲の顔を覗き込むが、彼女は目を閉じている。

「美咲？」

呼びかけても返事はない。一晩中、繰り返したキスに赤く腫れた唇。泣きながら声を上げ続けたせいで、声が嗄れたのだろう。

敦也もひどく喉が渴いていた。

水を取りに行こうと腕の中の美咲の額にキスをして、敦也は美咲をベッドに横たえようとしたが、そのベッドがひどい有様になっていることに気付いた。

一晩中、ずっと激しく、執拗に抱き続けたのだ。当然の結果とも言える惨状だった。

二人分の体液を吸い込んだシーツは濡れて、足元でぐちゃぐちゃに丸まり、マットレスはずれていた。ベッドの下には毛布と脱ぎ散らかした二人分の服が落ちている。

それに、敦也の体も美咲の体も濡れた体液が乾き始め、ひりつき強張る感じがした。

このまま横になるのは無理そうだと、敦也はまだ比較的汚れていない毛布を拾い上げて美咲の体を包み込む。

部屋の中は、綺麗好きな美咲らしく整理整頓されていた。適当に開けたチェストの中に替えのシーツを見つけて取り出すと、ほのかに優しい香りがした。美咲が勤めている会社に取り扱ってい

るものだろう、チェストの中にはシーツ類と一緒にポプリが入れられていた。

毛布で包んだ美咲を起こさないよう、敦也はまるで壊れ物を扱うみたいにそっと抱き上げ、ラグの上に静かに横たえる。

疲れ切っているのか、美咲の意識が戻ることはない。

手早く汚れたシーツをはがすと、取り出した替えのシーツをベッドマットにゴムバンドで止め、ずれていたマットレスの位置を直す。

ベッドを整えると、再び美咲を毛布に包んだままベッドに寝かせた。

汗で濡れた前髪が額に張り付いているのを、指先で梳いてかき上げる。しっとり絡むその感触が、気持ちよかった。

今までに付き合いのあった女たちがこんな敦也の姿を見たら卒倒するだろう。

甲斐甲斐しく事後の世話を焼き、愛おしげに相手の髪を梳く自分なんて、敦也にだって想像出来なかつた。

美咲の髪を、いつまでも触っていたと思ったが、敦也は自分の体のべたつきが気になり、シャワーを浴びるためにベッドを離れた。

シャワーを浴びて、濡らしたタオルで美咲の体を綺麗にし、目が覚めた時に水がすぐ飲めるようにペットボトルをベッドサイドに用意する。

ここまでしても、美咲はまだ目を覚ます気配はなかつた。

人心地がついた時、ベッドの下で美咲のスマートフォンが鳴っているのに気付いた。聞いたこと

のないメロディラインに、日本のポップスだろうとあたりをつける。

スマートフォンを拾い上げると、画面には『恭介』と表示されていた。

——美咲の恋人か。

敦也はスマートフォンの画面に表示される名前を、無感動な瞳で見つめる。

繰り返し何度も奏でられるメロディは、やがてふつりとやんだ。

敦也は美咲のスマートフォンを操作すると、恭介からの何件かの不在着信と、メールが来ていることを確認する。

それらを数秒見つめた後、スマートフォンの電源を切って部屋の隅に放り投げた。そして再び美咲を抱き寄せる。

腕の中に囲い込んだ美咲を、敦也はもう手放すつもりはなかった。

だから、たとえ美咲に恋人がいても構わない。

美咲が誰かのものだというのなら、奪うまでだ。

どんな手を使っても、追いつめることになっても、美咲が欲しかった。

☆

美咲は今が夜なのか、昼なのか、時間の経過がよくわからなくなっていた。

一度、空が明るくなった気がしたが、それも確かではなかった。

過度に与えられる快楽に何度か意識を失い、目覚めるたびに敦也の腕の中でまた喘がされた。

深々と突き上げられ、何度目かなんて数える気にもならないほど快楽の波に襲われ、美咲はイッた。

「……うん……はあ……」

もうため息のような声しか出なくなり、揺れる視界に映るのは、琥珀色の獣のような綺麗な敦也の瞳だけだった。目が合うたびに何故か満足そうに啜う敦也に、甘く口づけられる。

その残酷な甘さに、行為の間中何度も泣いた。気まぐれに与えられる甘さに、心臓がひどい痛みを訴えていた。

一方的に翻弄するだけなら、甘さなど与えるなどと思う。
与えられる甘さに、何かを期待しそうな自分がある。

ただの錯覚だと思うのに、甘い口づけが毒のように美咲の心を蝕み、理性を崩壊させた。

「……っ」

美咲の体の中にある昂りが膨らみ、体の奥に断続的に敦也の精が放たれる。

ぼんやりとした意識の中で、それを感じた。

——また、中に出された。

脱力した体から、敦也がゆつくりと離れていく。

二人分の体液が溢れ、美咲の内腿にどろりとした流れを作る。シーツは互いの体液で湿って、透けるほど濡れていた。

敦也は一切避妊をしなかった。二週間前も今夜も——二週間前のあの時は、生理直前だったから妊娠の危険はなかったが、今回はどうだろう。

妊娠についての恐怖はあったが、今の美咲には、それさえも遠い現実だった。

何も考えられなかった。ただ、敦也が与える快楽に反応することしか出来なかった。

意識が朦朧とし、心身ともに疲れた体では指先一つ動かすのさえ億劫だった。

喉がひりついて、痛いほどに渴きを覚える。

「……………み……………ず……………」

喘ぐように呼吸をして、無意識に呟いていた。泣き濡れた瞳に、見慣れた部屋の天井がおぼろげに映る。熱を持って腫れたようになっている瞼が重く、美咲は瞼を閉じた。

多分、また束の間意識を失っていたのだろう。次に気付いた時にはベッドヘッドに凭れて座る敦也の胸の上に、力の入らない体を抱え上げられていた。

二人分の体液に濡れていたシーツはいつの間にか取り替えられ、べたついていた下肢もさらりと乾いていた。

敦也が綺麗にしてくれたのだろうか、ぼんやりと考える。

美咲が目覚めたことに気付いたのか、敦也が冷えたミネラルウォーターのペットボトルを差し出してきた。

激しい喉の渴きを覚えて手を伸ばす。しかし、細かく震える指先は力が入らず、せっかく差し出されたペットボトルを受け取ることにすら出来ない。

敦也の胸の上に、ぱたりと美咲の指先が力なく落ち、もがくように震えた。

そんな美咲の様子に、敦也が口元にペットボトルを運んだ。見上げると、敦也が飲めというように顎を動かす。飲ませてくれるのだろうか戸惑いながら口を開けると、そつと慎重に水が美咲の喉に流し込まれた。その冷たい刺激に、自分がどれだけ喉が渇いていたのか自覚した。

美咲は与えられた水を一気に半分ほど飲み込んだ。乾いた体に水分が行き渡る。

うまく飲み込めなかった水が、一筋、二筋、喉から胸元まで流れていき、その生ぬるい冷たさが気持ちよかった。

ホツとため息のような、吐息が零れる。

美咲が満足したのがわかったのか、敦也はペットボトルを横に置くと煙草を取り出し、口に咥えた。

火をつける前に、脱力して今にも崩れそうな美咲の体をもう一度胸の上に抱え直し、肩に腕を回して支えた。

敦也は何も言わず、肩に回した方の手を美咲の長い黒髪に絡めながら、煙草に火をつける。

奇妙に穏やかな沈黙が二人の間に流れた。

敦也が愛飲する煙草からくゆる紫煙が、二人の沈黙を包む。

美咲はもう疲れすぎていた。何も考えられなかったし、考えたくもなかった。

寄りかかった敦也の胸から規則正しく打つ鼓動の音が聞こえてきて、眠気を誘われる。

うとうととまどろむ美咲の髪を、静かに敦也が梳いた。その穏やかで優しい触れ方に、美咲の意

識は静かに深く、眠りへと落ちていく。

敦也の吸う煙草たばこの匂いに刺激され、心の奥底で眠らせたはずの古い記憶が夢として美咲の中に浮かび上がった。

自室で雑誌を読んでいた美咲は、極微かに聞こえてきたピアノの音に顔を上げた。もうすぐ日付が変わろうとする時間。

また敦也が防音の練習室の窓を開けたまま、ピアノの練習をしているのだろう。

美咲たちの家は住宅街の外れの丘の上にあるため、周囲は閑散としていて、隣近所とも距離がある。だから、こんな時間に窓を開けてピアノを弾いても、苦情がくることはない。

そのせいか、敦也はたまにこうして深夜に窓を開けたままピアノの練習をすることがあった。

特に両親が留守にしている夜は、必ずと言っていいほどそうしていることに美咲は気付いていた。今夜も両親はいない。

美咲は部屋の電気を消すとそっと窓を開けた。

窓を開けるとピアノの音がよりはつきりと聞こえてきて、美咲は窓辺に寄りかかり、その音に耳を澄ませる。

美咲は、敦也本人は苦手だったが、敦也の弾くピアノの音は好きだった。

敦也のピアノを聴くたびに、これが才能なのかと思う。

敦也の音は本人の気性通り、鋭く熱い。触れば血が出るのではないかという激しさと、繊細せんさいで緻密ちみつな計画性を矛盾なく併せ持っている。

中学三年生にしてすでに様々なコンクールで絶賛され、いくつもの賞を受賞していた。

コンクールで弾く熱く激しい音も嫌いではなかったが、美咲は今夜のような夜にひっそりと奏でられる穏やかな優しさを含んだピアノの音の方が好きだった。

だから敦也が時々、深夜にピアノを弾いている時は、こっそりと窓を開けて聴いていた。

誰も知らない深夜のリサイタル。敦也も知らない美咲だけの秘かな楽しみ。

暗闇の中、目を閉じて敦也のピアノの音に耳を傾ける。

最近、敦也のピアノの音が変わった。今までとは違う艶つやと深みが音に加わり、どこか官能的になった響きは、ますます美咲を惹きつけた。

敦也の変化が何に起因するものなのか、美咲にはわからない。

わからないが、嫌な変化ではないと思う。

深く静かに響く敦也の音が、美咲を包む。

だけど、美咲だけのこの真夜中の演奏会は、もうすぐ聴けなくなる。

来年、中学の卒業とともに、敦也は留学することが決まっていた。これからは、こんな風にこっそりと敦也のピアノが聴けなくなると思うと、寂しかった。

敦也は一時間ほど、様々な曲を気まぐれに弾いていた。美咲はただ静かに奏でられる優しく、どこか甘い音を聴き続けた。

やがて、ピアノの音が聞こえなくなり、今夜の演奏が終わったことを知る。美咲はまた静かに窓を閉めた。

時刻はとつくに日付が変わっていた。もう寝ようと就寝の準備をしていたが、喉が渇いていることに気付いて、美咲は音を立てないように部屋から出て、階下の台所へ向かった。

階段を下りてすぐの、敦也専用の練習室の扉が半分開いたままになっている。閉め忘れたのかと、何の気なしに中を覗いた。

電気のついていない薄青い闇に包まれた部屋の中、ピアノの前に敦也が座っていた。

敦也が吸っている煙草の小さな赤い火が灯っているのが、目についた。家の中、隠すでもなく吸う煙草の紫煙が静かにたなびいている。

演奏の後の疲れなのか、どこか気だるげに煙草を吸う敦也には、未完成な少年としての透明さと、ぞくりと滴るようなアンバランスな色気があった。

その静かな佇まいに美咲は目を奪われ、心臓のリズムが狂った。

そして、不意に。本当に不意に、美咲は最近の敦也の音の変化の理由を悟った。

敦也はきつともう、男になったのだろう。性別としての男ではなく、本当の意味で――

この綺麗な義弟が触れた誰かがいる。その誰かが敦也の音に艶と深みを与えたのだと思うと、美咲の胸を鋭い痛みが走った。

あまりに鋭く走った痛み、呼吸さえもうまく出来なくなる。

美咲は着ていたパジャマの胸元を、きつく掴んだ。

――何故、自分はこんなにも混乱しているのだろうか？

この綺麗な義弟に恋人の一人や二人いたところで不思議ではない。なのに、何故か自分は泣きたくなるほど動揺していた。

不意打ちの嵐のような混乱に、どうしていいのかわからなくなる。

その時、気だるそうに煙草を吸っていた敦也が、美咲の視線に気付いたのか、ふと顔を上げた。

暗闇の中、はつきりと敦也の蜜色に輝く瞳と目が合った。

入り口で呆然と立ち竦む美咲の姿を確認して、敦也の琥珀色の瞳が一瞬驚きに見開かれ、次に眇められる。

まるで獲物を見つけた野性の獣のように、癡猛な視線でこちらを見つめる敦也に、美咲の心臓はさらにリズムを乱し、耳鳴りのようなおかしな音が体の中に響く。

ぞくり、と背筋を恐怖にも似た何かが駆け上がった。

そして次の瞬間、美咲はそこから逃げ出した。何も言わずに身を翻し、自分の部屋に駆け込んだ。

――逃げなければと思った。今、逃げなければ……

わけもわからない衝動に駆られ、美咲は敦也の前から逃げ出していた。

安全な自分の部屋の中で、美咲は必ずするとドアを背にして座り込む。

胸は変わらず鋭く痛み、狂ったリズムを刻んでいた。背筋を冷たい汗が伝い落ち、息が上がる。

自分の中で巻き起こった嵐のような感情に、美咲は対応出来なかった。

驚愕とも、恐怖とも違う何かが、美咲の中で渦を巻く。